

「サーヴィス」について

井田喜久治

まえがき

一 サーヴィスについての諸見解とその問題点

(1) 遊部久蔵氏の見解について

(2) 森下二次也氏の見解について

二 サーヴィスの本質と労働の二重性

まえがき

この小論でサーヴィス (service, Dienst) 概念の把握をこころみるゆえんは、主として、つぎのごとき諸事情にもとづいている。すなわち、人間の運輸にさいしては、商品の運輸のばあいと同様に、価値の現実的創造がおこなわれるといっているマルクスの説明を基礎づけるにあたり、たとえば、『剰余価値学説史』第一巻第四章「生産的および不生産的労働にかんする諸学説」のうちの「三、生産的労働にかんするスミスの解釈における二者闘争性。第一の説明——資本と交換される労働としての生産的労働にかんする見解」、また同じく『剰余価値学説史』第一巻補遺十二、「資本の生産性。生産的および不生産的労働」(d)「資本にとつての生産的労働の独自の使用価値」等の説明に依拠してサーヴィスにたいして現実的価値創造者としての性格を承認し、かかる観点から、人間の運輸がたんなるサ

「サーヴィス」について

ーヴィスであるにもかかわらず生産であるといっているのがマルクスの見解である、という理解を本質的契機として一連の理論がみられるのである。人間の運輸の性格をいかに規定すべきか、人間の運輸をふくむ交通運輸の本質をいかに把握すべきかの問題については、すでに、「運輸費」ならびに「人間の運輸にかんする諸論稿（本誌第十五巻第二号、第二十巻第三号および第二十巻第四号）」をつうじて基本的にはあきらかにしえたものと考えられるのであるが、指摘された上述の事態にかんがみ、サーヴィス概念の検討によつてさきの諸論稿においてひきだされたいくつかの結論を検証し、同時に、右の傾向につきその理論的当否をもあきらかにすべきことが要請されているものといわなければならない。

他方では、商業をサーヴィスとしてとらえて、それが教師、医師、芸術家さらには女中、売春婦といったいわゆるサーヴィスと同等な性格をもつサーヴィスであるといっているのが科学的経済理論の擁護者をもつて任じている人々の理論にみられるいま一つの無視すべからざる傾向であるといふことができるのである。しかも、まことに興味あることには、人間の運輸の問題を考察しているばあいも商業をサーヴィス規定としているばあいもいずれもほとんどすべての論者をつうじて、サーヴィスとはなにかについての理論的把握においてきわめて不充份であり、さきにあげた『剰余価値学説史』においてはサーヴィスという概念がいかなる内容をもつものとして使用されているかについてはさして深い考察がなされていない、というのが右の諸傾向に属する論者にみられてさきの特徴と制約しあっているいま一つの根本的特徴をなすものと考えられるのである。商業はサーヴィスであるのかないのか、商業をサーヴィスとして規定することができるとすればそれはいかなる意味でそのように規定しうるのか等々すべてサーヴィス概念こそがあきらかにされなければならないのである。さきの諸事情というのはこうした諸点をさしているものであって、つぎ

にこのことを例証すべくいくつかの見本を提供してみることとしよう。

人間の運輸の問題をサーヴィスとして取扱っている理論の一例。

中西健一氏は、「交通業がどのような根拠に基いて産業資本の定着地盤とされるか」をあきらかにすべくものされた論稿、「マルクスにおける交通Ⅱ生産説の二つの根拠——交通生産説論争によせて——」（大阪市立大学経済研究会「経済学雑誌」第三十七巻第四号所収、二二一六〇ページ）のなかでつぎのようなマルクス批判のことばでその考察をはじめている。

「……マルクスは……交通業を物質的生産部門と呼び、交通資本を生産資本……と規定しながら、その根拠……は二元的であって、しかも二つの契機……関連について明確な説明を与えていない……。ここにマルクスに出発する交通理論がその端緒……において混乱せざるをえなかった理由が伏在しているのである……。……。第一の論拠と……よぶものは、『資本論』第Ⅱ巻第一章第六節「運輸費」中の……叙述に示され……。運輸業——交通業が生産である根拠を、それが……本来の意味での生産、物質的生産過程の、追加——『追加的生産過程』……として機能するところに求めている思想である。

第二の根拠というのは、『資本論』第Ⅱ巻第一章「貨幣資本の循環」第四節「総循環」の……叙述において展開されている……交通が生産であるのは、それが場所変化という有用的効果・用役を生産するからであるとしている見解である。このマルクスにおける交通生産説の二つの論拠……は相互否定的・二者択一的な……原理であって、二元論的誤謬におちいることなくしては相互補完的に生かす道はない」（中西、前掲論文、二七一—二八ページ）。

そして、かかる二元論的誤謬から解放されうる唯一の道は、「第二の根拠すなわち有用的効果生産説こそ……立脚

すべき見地である」(中西、前掲論文、四二ページ)といって、その根本的解決を、人間の運輸について生じる空間的変化はサーヴィスとしてあらわれるとの周知の文章をふくむ『剰余価値学説史』第一巻補遺、十二、(K)の説明のなかに求めて、つぎのようになっているのである。

「この叙述内容については三つの論点が指摘できる……。第一は人間輸送に関しては交通過程の生みだす場所変更は、用役・サーヴィスとして現われる、第二は商品運送に関しては運送対象たる商品の使用価値は、場所変更によって、一定の変化を生じる、第三に輸送対象の区別を問わず交通業には生産的労働が投下されており、物質的生産部門であると規定されていることである。……なすべきことは、……これらの関連……の統一的理解に達することである。……問題が第一と第三の論点の把握、すなわち用役(＝サーヴィス)として現われると規定されている人間輸送が物質的生産部門とされ……ているのはいかにしてかということになる。そして……これを、……『直接的生産過程の諸結果』および『剰余価値学説史』第一部の生産的労働と不生産的労働の理論について説明することができると考えるのである」(中西、前掲論文、四六―四七ページ)。

氏は、この「考え」にもとづいて、右の二著から多くの説明を論拠としてとりだして、「人間輸送が『単なるサーヴィスとして現われる』といわれながら、『物質的生産の第四の領域』とされるのは、資本主義の意味でサーヴィスが生産的労働と規定されていることに基くのである」(中西、前掲論文、五一―五二ページ)と論断しているのである。この断定の是非については、行論でのサーヴィス概念の考察がこれをあきらかにするはずである。

商業をサーヴィスとして取扱っている理論の一例。

橋本勲氏は、サーヴィスの問題をもっぱら考察している論稿、「サーヴィス労働の生産的性格——生産的労働論争

批判——」（京都大学経済学会「経済論叢」第九十二巻第四号所収、四一—七〇ページ）において、この点についてつぎのようになっている。

「商業労働とサーヴィス労働は、……両者とも、その労働が生産物に対象化されず使用価値も価値も生み出さない点において共通し、その点で物質的財貨を生産する労働と対立するので、……立入った問題を捨象し、サーヴィス労働という外延の広い概念の下に一括した」（橋本、前掲論文、四二ページ）。

つまり、氏の論稿のこの標題にとってもっとも肝心かなめであると考えられるサーヴィス概念そのものの検討は立入った問題であり、したがって主題にとって非本質的なものであるがゆえに考察しないというのであろうか。

一 サーヴィスについての諸見解とその問題点

まず、多くの論者が主題についてあきらかにしている諸見解に学びながら、遊部・森下両氏のそれを中心にそこでの問題点の検討をつうじて、サーヴィスについての正しい理解に達すべくこころみることとしよう。

(1) 遊部久蔵氏の見解について

「まず生産的労働の本源的规定についてみるとしよう。それは……労働過程の一要因としての意義といえよう。労働過程……は、その契機として客観的生産諸条件……と主観的生産条件……とを有する。生産的労働はこのうちの後者、労働力の機能、労働そのものとして把握されねばならない。……。とくに重要なのは、……この場合生産的労働にいわゆる『生産的』とはなにかということである。……生産的労働は物質的生産にかかわるものであって非物質的

生産にはかかわらない。ここで物質的生産というのは、労働の結果が労働生産物をもたらすような生産である。換言すれば、使用価値または財の生産である。……いわば生産と消費との間に物が介在するのである。これに対して非物質的生産においては労働の結果が労働生産物をもたらさない。換言すれば労働それ自体が使用価値である。いわば生産と消費との間に物が介在せず、生産即消費である。非物質的生産における労働力の機能が不生産的労働である。私見によれば、『サーヴィス』……とはこのような不生産的労働にほかならない」（遊部久蔵「生産的労働とサーヴィス」慶応義塾経済学会「三田学会雑誌」第五十巻第十二号所収、二一三ページ）。

つづいて氏は、右のごときサーヴィスについての一般的规定をさらに一步すすめて、生産的労働との対比においてつぎのような特徴づけをおこなっているのである。ここでは、氏自身おこなっている表示形式とはことなつて、生産的労働を(a)不生産的労働を(b)でしめし並列的に引用することとする。

「一

- (a) 労働過程（人間と自然との間の資料変換の一般的条件、……）で機能する。
- (b) 労働過程で機能しない。

二

- (a) 労働の生産物の媒介によつて迂回的、間接的に人間の欲望を充足せしめ、人間の生命の再生産に寄与する。

- (b) 直接的に人間の欲望を充足せしめる。必ずしも人間の生命の再生産に寄与しない。

三

(a) 労働の生産物が、『有目的効果』……をもつ。それというのも、労働が特定の対象に『固定し実現される』……からである。

(b) 労働そのものが『有目的効果』である。それというのも労働が特定の対象に『固定し実現されない』……からである。労働は『一般にそれを仕遂げた瞬間に消失する』……。

四

(a) 労働力の使用価値。

(b) サービス自体が使用価値。

五

(a) 物質的生産過程に属するから、一般に生産手段……を必要とする。

(b) 生産手段（とくに労働手段）を必要としない場合がありうる。（また労働対象が人間であることもある。
——歌い手、俳優、教師、牧師など）。

六

(a) 社会の下部構造に属する。

(b) 社会の上部構造に属する」（遊部、前掲論文、四ページ）。

氏は、さきの規定と右のごとき特徴づけにととずきかつそれに対応するものとして、サービス提供者の具体的内容をつぎのように例示している。といっても、これはスミスの与えた分類からとったものではあるが。

「一……君主、司法および軍務の全官吏、全陸海軍人、

「サービス」について

二 ……牧師、法律家、医者、各種の文人および

三 俳優、道化役者、音楽家、オペラ・シンガー、オペラ・ダンサー……」（遊部、前掲論文、六ページ）。

また別のところでは、さきの同じ特徴をもつサーヴィスの具体的な例示として、「……非物質的生産のもとのサーヴィス提供者、例えば俳優、裁縫師、料理人、給仕、ピアノ製造者、著述家など」（遊部、前掲論文、一二ページ）を『剰余価値学説史』からの引用であるといつて数えあげているのもみられる。

そして、物質的生産の分野における労働のみが価値を生産しサーヴィスは価値を生産しない、といつてこの問題をつぎのように考察しているのである。

「なにゆえにサーヴィスは価値を形成しえないか？ それはサーヴィスはその行為の瞬間に消失し痕跡をのこさないからである。……。元来価値は使用価値によつて担われるべきもので……、生産行為そのものが使用価値である場合には、価値の形成される余地はなくなる。価値は対象化され凝結された抽象的・人間的労働であるということがあらためて確認されねばならない」（遊部、前掲論文、八ページ、傍点―原文）。

これがサーヴィスにかんする氏の見解のうち、さしあたり必要と考えられるもののほぼ全貌である。これは、科学的経済理論を擁護する立場からするサーヴィス概念の正統的把握の一見本あるいは代表的見解であるといつてよいであらう。氏の見解のなかには傾聴すべきいくつかの論点をふくんでいる。たとえば、さきに列記した、二種の労働の特徴を比較したとき、三のbならびに四のbでそれぞれ、労働そのものが有利用的効果であるといひサーヴィス自体が使用価値であるというのがそれである。とはいへ、氏の理論の破綻もまたそこに淵源すると考えられるのであるが、それはとにかく、ここには、深刻な検討を迫られつつ依然として未解決におかれた問題点をふくむこともまた事実で

ある、とわたくしには考えられる。ことに、氏が立論の基礎としそこから多くを引用している『剰余価値学説史』あるいは『直接的生産過程の諸結果』の典拠の考察においてこの感を深くすることを否定するわけにはいかない。

いままたとおり、裁縫師、料理人、ピアノ製造者が俳優、給仕、著述家とともにサーヴィス提供者でありしかもそれらが非物質的生産の領域でのサーヴィス提供者であるとして『剰余価値学説史』のなかで論じられている、と氏はいつている。だが、この点についていえば、『剰余価値学説史』のどこでマルクス自身そのようにいつているかについての指示はいつさいなされていない。たとえば、裁縫職人をみてみるがいい。どうして彼が非物質的生産のもとのサーヴィス提供者であるということができるのであるうか。彼は、ズボンという使用価値を生産するのにどうして非物質的生産の分野での活動であると氏は考えるのかあきらかにしていない。それは、非物質的生産どころではなく、ズボンという「労働の生産物の媒介によって人間の欲望を充足せしめる」生産的労働そのものであり、「労働が特定の対象に固定し実現されて、労働の生産物が有目的効果をもつ」ている氏の厳密な規定における生産的労働そのものであらう。裁縫職人の労働について、それは、「労働が特定の対象に固定し実現されず、労働は一般にそれを仕遂げた瞬間に消失する歌い手、俳優」のばあいのごとく、「社会の上部構造に属する非物質的生産におけるサーヴィスである」という氏の説明にたいして真向から対立する経済活動そのものである。こうして、裁縫職人の労働をもって非物質的生産に属するということはいかにしても誤謬であることはあきらかではなからうか。それにもかかわらず、氏が、物象的使用価値を生産する裁縫職人を不生産的労働者であるといふその労働の提供をサーヴィス提供である、といつてさきの二種の労働にたいするみずからの特徴づけにたいする撞着をあえておこなっているのは何故か。『剰余価値学説史』あるいは『直接的生産過程の諸結果』のなかで、裁縫職人の労働提供をさしてサーヴィスといつている説

明がたびたびみられるのは周知のところである。それによれば、裁縫職人は生産的労働者ではないといわれている。また、この布をズボンに転形するという彼のサーヴィスすなわち裁縫労働あるいは裁縫労働として提供するサーヴィスとも表現されている。つまり、裁縫職人とその労働をサーヴィス提供者ならびにサーヴィスとして規定し、さらに、右の説明をふくむサーヴィスに論及しているところにおける文章全体を、「サーヴィスを提供する労働としての生産的労働。資本主義の諸条件のもとでのサーヴィス提供の購買。……」なるみだしのものと考察しているのであり、したがって氏が、裁縫師をサーヴィス提供者として取扱うのは理由のないことではないどころではなく、この点にかんするかぎりにおいて、マルクスの説明にいさかも矛盾していない。だが、両者の一致はこの点にのみあるのである。マルクスの説明にはそれが非物質的生産であるとはひとこともいっていない点において決定的なこととなっているのである。ここで、裁縫職人は生産的労働者ではなくその労働はサーヴィスとして規定されている。そして、生産的労働をもってサーヴィスを提供する労働とされていることを論拠として、氏が、この説明について、生産的労働ⅡサーヴィスⅡ非物質的生産における労働力の機能という氏自身のサーヴィスの定式化と矛盾することなくその論拠たりうるものであると考えたすれば、それは、この説明にたいする皮相的な把握たるそりを免れることはできない。ここにおける問題の本質は、結果において、「労働が特定の対象に固定し実現されるか」それとも「労働は一般にそれを仕遂げた瞬間に消失するか」にあるのではない。いまたとおり、裁縫職人はその現実的労働の成果を対象的生産物において実現するにもかかわらず、この労働はサーヴィス提供にすぎないものと規定されたがって生産的労働として把握されなければならない。だが、だからといって、氏がそのように考えているように、価値・剰余価値を生産しないという意味における不生産的労働とはすべて「その行為の瞬間に消失し痕跡をのこさない労働であ

るのだ。」何故なら、「元來価値は使用価値によって担われるべきものであるが、使用価値はつねに一つの自然的基体をふくんでいる。生産の物的成果がうまれず、むしろ生産行為そのものが使用価値である場合には、価値の形成される余地はなくなる」ということはイコールにはならないのである。それ自体では無条件に正しいといふべき氏のこの価値論の命題も、当面の関連についてみるかぎり無力といふべきではなからうか。さきに、わたくしは、「人間の運輸」の問題を考察したとき、必要なかぎりにおいてサーヴィスに言及してつぎのように指摘したのである。

「貨幣所有者によって購買された労働は、生産物に物質化され生産物それ自身の対象的属性となり価値として独立化するといった関係はまったく問題になりえない。ここに貨幣としてある一定価値額の現実的増大はいうまでもなく元本のたんなる維持すらも問題になりえないこととなる。したがって、それは、資本を生産しない・生産的労働でない・労働であると規定することもできるであろう。これは……サーヴィス概念の把握における一要点をなすものと考えられる」（『人間の運輸』について本誌第二十卷第三号所収、七一ページ）。

ここでいっている労働が生産物の価値として独立化するという関係は問題になりえないということはすなわちこの労働が行為の瞬間に消失し痕跡をのこさないといふことの、みを内蔵しているものではけつしてないといふことを理解することはきわめて重要である。そうしたことが生じうる条件あるいは物的基礎がそもそも存在しないのだ、こうした諸条件はサーヴィスが問題とされているばあいには問題となりえないのだ、といっているのである。とはいえ、氏が、サーヴィスをもってこの労働は生産即消費としてのみおこなわれるという意味における労働それ自体が使用価値であるという把握を固執するかぎり、つまり、氏がそうしているように、サーヴィスを個人的サーヴィスあるいは人格的サーヴィスとしてのみとらえるならば、このことの解決は不可能であることはあきらかである。ここにサーヴィ

スにたいする正統的理解の内蔵する決定的な難点あるいは皮相性があるものと考えられるのであって、氏の理論にみられた自己撞着は、まさに、このことを如実にしめしていたことはいまみてきたとおりである。

ところで、氏の見解には看過することのできないま一つの問題点がある。それは、「スミスにおける規定の内容がマルクスの解釈からハミ出す部分を有する」との解釈のもとに、マルクスによるこの「スミス解釈」への批判あるいはマルクスの説明にみられる「外見的矛盾」の問題の検討として、サーヴィスの問題に関連してその主要な一側面をなすものとしてべられているものである。

マルクスが、生産的労働と不生産的労働についてのスミスの見解について、資本制的生産の立場から生産的労働を資本と交換される労働であるといっているのは正しい見解である、といってこれをこの問題にかんするスミスの第一の見解とよび、この見解とからみあって展開されていて商品に実現される労働を生産的労働であるといっているのは生産的労働の規定としては間違いであるとして、これを前者に対比して、この問題におけるスミスの第二の見解であるといっているのは周知のところである。そして、そのばあい強調されていることは、生産的労働としての労働の属性は労働の質料的規定性とはいっさい無関係であるということである。ところが、マルクスは、生産的労働についてスミスの第二の見解を検討する段になって、一、見これと矛盾し正面衝突するとみられるつぎのごときあらたな観点を示しているのである。

「とはいえ、あきらかに、資本が生産全体を征服するのと同じ程度で、……ますます、生産的労働と不生産的労働とのあいだの質料的区別があらわれるであろう。けだし、前者は、わずかの例外をのぞけばもっぱら商品を生産するのであるが、後者は、わずかの例外はあるが、個人的サーヴィス提供だけをおこなうであろうからである」（前掲書、

インスティトゥート版、二二三―二二四ページ、長谷部訳、二二二ページ、傍点―原文）。

また別のところでもこの点にふれて、あきらかにされたあらたな観点にもとづく生産的労働と不生産的労働との規定にたいして、労働の質料的規定性にたいしてまったく無関心であったさきの生産的労働の規定とはことになった、生産的労働の第二の副規定でありそれを補足する副規定であるともいつているのである。このようにして、社会的生産関係との関連のみを含意しているスミスの一方の規定にたいしてかつて最大限の讃辭を惜しみなくおくり、「彼が生産的労働を直接に資本と交換される労働として規定したことこそは、彼の最大の科学的功績の一つだ……」（前掲書、一二〇ページ、訳、二二六ページ）といっていたのであるが、いまここに、副次的とはいえ、マルクスみずから資本制的生産の立場からの「逸脱」にもとづく労働の区別づけをあらたに補足することをあきらかにしているのである。

ところで、氏は、「外見的に矛盾する」これら二つの規定の関連について、マルクスが商品たる物質的富に実現される労働を生産的労働であるといつて、これを資本と交換される労働をもって生産的労働とする規定にたいする補足的な副規定であるといつているその補足的について、補足的な規定すなわち「還元的な規定」である、といつてつぎのような批判的考察をつうじてマルクスを「擁護」しているのである。それは、さきにサーヴィスにかんするスミスの見解として大きく三種類にわけて、社会の上部構造に属する諸分野を具体的に例示している氏の文章を紹介していたが、それにつづいてのべられている説明である。

「これがマルクスのいわゆる『アダム・スミスが第一の原則的な規定である本質的差異にくわえて、ほかのものをつけくわえざるをえなかった観点の一つ』にもとづく分類……である。すなわちスミスは生産的労働と不生産的労働との区別点を物質的生産にぞくするか否かにもとめたのである。これはまさに本源的规定にかかわる。しかしマルクス

は『剰余価値学説史』第一巻のなかでは……資本主義的規定のいわば補足的なものとして……後者の規定に還元してみているのである。……スミスにおける規定の内容がマルクスの解釈からハミ出す部分を有する……。……スミスの時代、またマルクスの時代においては、物質的生産のみが一般に資本主義的生産関係に包摂され、非物質的生産は一般に資本主義的生産関係に包摂されていなかったということ……から、資本主義的生産的労働Ⅱ物質的生産に従事する生産的労働、資本主義的不生産的労働Ⅱ非物質的生産に従事する不生産的労働というふうに、二つの規定の合一が結果し、そこで第一の……資本主義的規定の立場から第二の規定がなお合理的なものとして容認されたのである。しかしこの解釈には二つの限界がある……。一つは歴史的意味において……、その後の資本主義の発達によって……非物質的生産まで一般に資本主義的生産関係に包摂されるにいたると、……非物質的生産に従事するサーヴィス労働も価値形成的であるとする解釈がマルクスの右のスミス解釈をそのまま援用して主張される……。つぎは論理的意味において……、マルクスの右の解釈においては生産的労働の本源的规定が歴史的规定に還元され……外見的には『資本論』……の本源的规定と『剰余価値学説史』第一巻の歴史的规定との間には矛盾が存すると考えられざるをえなくなってくる」(遊部、前掲論文、六―七ページ、傍点―原文)。

ここにみられるような問題の提出ならびにマルクス批判は、けっしてひとり氏に限られてはいないのであって、サーヴィスの問題にふれている論者にみられる一般的現象である。あるものは科学的経済理論を「擁護」する意図をもって、あるものは科学的経済理論を根本的に修正する意図をもって。だが、その意図がいかにあれ、いまみたように、資本主義的生産的労働Ⅱ物質的生産に従事する生産的労働、資本主義的不生産的労働Ⅱ非物質的生産に従事する不生産的労働という等式が成立して「二つの規定の合一」があるならば、それは、けっして「外見的矛盾」などとい

って片附けるわけにはいかないのではなからうか。労働の内容とはぜんぜんかわりなき規定が、労働の内容にもとずく規定とイコールによる等式を成立せしめようというのであろうか。この「合一」の根拠として「スミスの時代」とか「マルクスの時代」とかの「時代」をもちだしたところでそれがどうだというのであろう。マルクス自身、資本制的生産の発展にともなって「直接には物質的富の創造にかかわりのない生産諸部面もますます資本に依存するようになった」(前掲書、一三九ページ、訳、二四四ページ) 事実を眼前にみているのであり、資本家教育施設企業家によっていとなまれている「教育工場がイギリスにたくさん実存しうる」(前掲書、三七四ページ、訳、六〇一ページ)ともいっているのであって、さきの等式の承認はなんとしてもあやまりであると考えられる。氏がそうしているように、補足的な規定すなわち還元された規定として「二つの規定の合一」を合理化するのではなくて、第一の規定にたいする補足的な副規定といい決定的な特徴とはことなる第二の副規定というとき、「これはまさに本源的規定にかかわる」規定として把握すべきであるとわたくしには考えられる。そしてこれは、他面ではまた、サーヴィス概念のあやまりなき理解を決定的に制約するものといわなければならない。このことに関連して『剰余価値学説史』の二つの文章をつぎに紹介しよう。一方は、「資本にとつての生産的労働の独自の使用価値」というみだしのもとでのべられているものであり、他方は、「サーヴィスを提供する労働としての不生産的労働……」というみだしのもとでのべられているものである。

「……生産的労働だということは、さしあたり労働の一定の内容・労働の特殊の有用性・または労働の対象化たる独自の使用価値・とは絶対にかかわりのない、労働の一規定である」(前掲書、三六四ページ、訳、五八七ページ、傍点―井田)。

「貨幣と労働との単なる交換は、労働を生産的労働に転化させないということ、他面、この労働の内容はさしあたり、どうしてもよいということは、あきらかである」(前掲書、三六七ページ、訳、五九二ページ、傍点―井田)。

いずれの説明にも「さしあたり」という限定が附されている。労働の一定の内容とは絶対に無関係であるという生産的労働ならびに不生産的労働にかんする規定性は、いずれのばあいも「さしあたり」妥当するそれであって無限定ではないとの注目すべき指示がみられるのである。当面の関連にかんするかぎり、一方の生産的労働についての説明と他方のサーヴィスについての説明とは、相互に対応しあい、いわば表裏の関連にあるということができよう。さきの「本源の規定にかかわる」ということに関連し、この「さしあたり」という限定に関連してさらにいえば、資本制的生産の発展によってつくりだされて、直接に収入と交換されるようなサーヴィスをおこなう不生産的労働者の大部分は個人的サーヴィスの提供者になるという事態、つまり生産的労働と不生産的労働とのあいだに質料的区別があらわれるということと、この不生産的労働者中の主要部分をなすこのサーヴィス提供者が、不生産的労働者としてではなく、資本の支配のもとにおかれて彼のために剰余価値を生産する生産的労働者たりうることとはまったく矛盾しないものとして理解すべきことが現実の事態そのものによって要請されているのであって、しかもそのばあい、不生産的労働の生産的労働への実体転化なるものはまったく問題になりえないことを知らなければならない。さきに氏のサーヴィスの定式化をみて、氏みずからあげていた裁縫職人がズボンを製作するばあいの労働をサーヴィスとよぶとき、それが破綻を法則的にふくむことをあきらかにしたのであったが、ここにみられる「さしあたり」なる表現をふくむマルクス自身の説明は、ここにふたたび氏の概念把握における誤謬あるいは一面性をあきらかにするものといえよう。

以上、遊部氏の見解をみて、問題の所在ならびにその解決の手がかりを追求してきたのであるが、これまでの検討によつてはぼその目的を達しえたものと考えられるので、つぎに、他方の潮流に属する見解のうち森下二次也氏の見解をとりあげて検討し主題についてのより深い理解に接近することとしよう。

(2) 森下二次也氏の見解について

さきにサーヴィスとはなにかについての理論的検討においてきわめて不充分であるといったが、この系列に属する論者についてこのことがとくに顯著にみられるのであるが、そのなかにあつて例外をなすものは森下氏であつて、氏はきわめて独自のと考えられる定式化をおこなっている。氏によるサーヴィスの一般的規定はつぎのごときものである。

「……勤労が生産的労働であるためにはそれは有用労働でなければならない。すなわち生産物としてみた勤労は有用な諸属性を持つものでなければならない。……。……ここにいう勤労の有用性は個人の欲望満足に関するものであつて、社会的に有益であるか否かの問題とは全然別である」（森下二次也「国民所得と生産的労働」「経済評論」昭和二十四年三月号所収、九一ページ）。

氏の見解における主要な契機をなすとみられる「個人の欲望満足に関する」という点は、十数年後の現在も依然として変更されていないようである。まえばぎで商業をサーヴィスといっている一例を紹介しておいたが、その引用文はこの点に関連している。すなわち、そこでの「商業労働とサーヴィス労働は」という書出がそれであつて、「商業労働とサーヴィス労働は、前者は直接に消費の対象になるサーヴィスを生み出すが、前者はそうでない点において異

るといふ点について森下教授より御教示を頂いた」(橋本、前掲論文、四二ページ)となっており、これは、さきにみた氏の見解の特徴と軌を一にしていることをしめすものである。そして、かかる一般的規定に対応するサーヴィスの具体的内容に関連して、つぎのような例示をふくむ説明がなされるのである。

「……所謂勤労役も……生産的労働といわねばならぬ……。役者、音楽家、娼婦等の労働は、その使用価値が労働力自身の活動と共に消失し、一つのものに対象化され固定されることのない故を以てミスによって不生産的労働とせられた……。……病院医師、私立学校教師、映画俳優、音楽家、派出看護婦、派出家政婦、酒場女給等々、マルクスの時代において『資本主義的生産方法はただ狭少の範囲においてのみ行われ』ていた非物質的生産が今日いかに広汎に資本主義的生産に属しているかを見よ」(森下、前掲論文、一七一―一九ページ)。

右にみたとおり、サーヴィス概念の性格規定においては、前項でみた遊部氏のばあいを除いて、氏の見解は群を抜いているといつていいのではなからうか。⁽¹⁾とはいえ、その概念規定において際立った明確さにつらぬかれており当面の主題にとつての興味ある考察がなされているとの右のわたくしの評価は、けつして、それが科学的な概念把握であることを意味してはいない。それは、たんに、この問題についてのまとまった見解の提示があるということ、そしてより重要なことは、氏の理論の根本的性格の一端が同じくこの問題の考察のなかにみられるものとしてそういつていのである。この点について先走りしていえば、サーヴィス概念の把握にみられる氏の理論は科学的経済理論からはもっとも遠いところに位置しているものとわたくしには考えられるのである。

(1) 中西氏は、さきの論稿において、同じ問題の考察からひきだされたその結論の一節で、森下氏の見解についてつぎのよう

にいつてわたくしのこの評価とはことなる見解を提出しているのであるが、これがまったく事実反していることはあきらか

である。いかに事実に反するかは、いづれ紹介される氏自身の古典からの引用ぶりや森下氏自身の見解の検討によってあきらかとなるであらう。

「資本制商品経済で価値したがって剰余価値……は物質的財貨Ⅱ物的形態をもつ商品生産部門……でのみ生産され、用役生産業では価値も剰余価値も生産され……ないというのが支配的見解である……。用役生産における資本制的生産方法の発展という現実認識に立ったこの支配的見解への疑問と異説は、それがほとんどマルクスの生産的労働概念の詳細な分析……を欠いており、近代経済学的偏見としてしりぞけられるのが常であった」（中西、前掲論文、五九ページ）。

そして、かかる「生産的労働概念の分析という手続きを欠いて」近代経済学的偏見として取扱われている代表として、「たとえば森下二次也教授『国民所得と生産的労働』がある」（中西、前掲論文、六〇ページ）といっているのである。

まず、その奇妙さに気づくのは「労働の有用性」ということばづかいであるが、これはたんなる繰返しではなからうか。サーヴィスあるいは勤労とは、そもそも、諸労働の質料的規定性・提供される具体的労働としての労働そのものの有用的性格・こそがこの労働を購買する貨幣所有者によって問題とされていることを意味している。だから、さきの表現が無内容な同義反復のみをしめすものであることは、労働の有用的性格の有用性あるいは労働の有用性の有用性といいなおしてみるのがいい。あるいはまた、「勤労が生産的労働であるためにはそれは有用的労働でなければならぬ」という氏の命題をとって、「労働の有用的性格が生産的労働であるためにはそれは有用的性格をもつ労働でなければならぬ」という具合にいいなおしてみるのがいい。こうした無内容な同義反復と考えられることばづかいに執拗に氏が固執するゆえんは、サーヴィスにたいして物質的富を生産する労働の提供する現実の使用価値すなわち使用価値の形成者Ⅱ有用労働とのまったく同質性を主張せんがためにほかならないものと考えられるのであるが、この点はさしあたりおくとしよう。そしてまた、氏がスミスの理論に言及したところでも具体的に例示したところでも、勤労を「その使用価値が労働力自身の活動と共に消失し、一つのものに対象化され固定されることのない」ばあいと

してとらえていることについてもたちかえるまい。問題は、それにすぐつづけられているこの有用性は「個人の欲望満足」にのみかわるといつていることに関連する。

ここに例示されている諸分野を概括するにあたって、氏は、それらを非物質的生産の分野であるといっているが、これは、『剰余価値学説史』等でなされている用語法とはあきらかにことになっている。そこでは、「非物質的生産の領域での資本主義の諸現象」として二つのばあいのがべられている。一つは、書籍や絵画のごとく、「生産と消費とのあいまに存立しえ、売ることのできる商品としてこのあいまに流通しうる」ばあいがあり、二つは、舞台芸術家、演説家、俳優、教師、医師、牧師のごとく、「生産されるものが、生産するという行為から不可分」なばあいである（前掲書 三七三—三七四ページ、訳、六〇〇—六〇一ページ）。すべていずれも精神的生産の領域のみを包含し社会関係のうちのいわば上部構造といわれる領域に属する。したがって、物質的生活資料の消費にとって必要とされる費用たる料理女、女中等のごとく、消費経済であるとはいえ、経済活動の分野にふくまれているいわゆる「非物質的生産」はこのなかに取上げられていない。だから、氏が、「勤労の有用性は個人の欲望満足に関するものだ」といつて商品の消費費用をもこれにふくましめ、それらをすべて「非物質的生産」であると規定するとき、それは、あきらかに科学的な概念把握とはことなる把握のしかたであるといわなければならない。そして、かかる基本的特徴をもつ氏の定式化は、他方では同時に、氏みずから批判的考察の対象としかつその説明を引用していたスミスによって、俳優、教師等とともに同じ経済学的性格をもつものとされていた君主、軍人、役人等の不生産的労働者は勤労の提供者たることから排除されるとの論理的帰結をも内蔵することとなっているのである。それは、問題が「社会的に有益であるか否かの問題とは全然別個である」ということによるものというのであろう。氏はこうした限定によって、社会

的に有益であり社会的必要に根ざす幾多の諸部門を捨象するという操作をおこなっている。

社会的に必要なもの、社会的に有益なものとはなにかについていえば、それ自体検討されなければならないであろうが、氏によって例示されていたサーヴィスの内容からすれば、右に指摘したごとく国家あるいは社会の名のもとにおこなわれている諸活動ならびにそれら諸活動の直接的担い手がこれにあたるものと推測されうる。⁽²⁾役人は社会における諸個人あるいは諸階級間における「秩序」を維持し「調和」を計る活動の提供者であつて、社会の諸個人は彼等の活動によって「秩序」維持にたいする欲望満足を獲得する、また軍人は諸国家間における平和の確立を願う諸個人あるいは他国にたいする植民地主義的野望にとりつかれてゐる資本家諸個人の欲望満足に関連するといえないわけではないとはいへ、それらは、学校教師、俳優の提供する活動に関連してゐる個人の欲望とその充足とはやはり大きな相違がある。そこで、この点については二つのことが考えられうるであらう。資本主義社会につづく社会主義社会においては、たとえ軍人、役人が依然として社会機構の重要な要素をなしかつ同じ名称を附与されてゐるとしても、それらの社会的性格はこれら二つの社会形態において質的にことなるであらう。だから、今日の形態における役人、軍人は個人の欲望満足とはいささかもかわることなき資本制的商品経済に固有の事情にもとづいて生成、発展せしめられたものとして位置づけることができよう。ついでにいへば、かかる思想は氏の商業にたいする把握のしかたにさいしてとくに顯著にあらわれてゐるようである。それは、個人的消費の対象を生みだすことなく、商品経済ならびに資本制的商品経済にのみ特有の關係であることによつてサーヴィスとしては規定しえないという考えかたがそれであつた。他方では、そもそも生産的かどうかという考察の対象とはなりえないものとして決定的に排除されるという考えかたである。商業は個人的欲望の充足との直接的関連をもたず商品経済に固有であるが故に不生産的性格を

もつとされているとはいえず、経済活動の一翼を担っている。だが、役人等はこのばあいとことなつて、彼の生みだす効用は個人の欲望充足どころではなく押しつけられる有用性ですらある。とはいえず、それは、「秩序」と「調和」を保持し「社会正義」を実現するものとして、きわめて抽象的な社会的に有益な活動の提供者でありしたがって以上のすべてのばあいと同列に論じえないものとされうるのであらう。だが、こうしたことについては氏はなんらあきらかにしていない。こうして、二つの大きな社会活動の分野がサーヴィスの領域から除かれ、のこるところはしたがって、すべて人間のなんらかの種類の欲望を充足させる生産物を生産するものとなつている。対象物として実存している消費されうる生産物であらうと、対象物としてではなく有用な形態での労働が提供する効用そのものⅡサーヴィスとして実存している消費されうる効用であらうと、それらはいずれをもふくみ、社会形態にかかわることなき人間生存のいわば法則であり歴史の根本条件としての意義を附与されることとなつていようである。

(2) マルクスは、機械の資本主義的利用の成果のすばらしさの一つとしてイギリスの人口調査にもふれてつぎのようについている。

「……大工業の諸部面で異常に高められた生産力は、じつさいまた、他のすべての生産部面で内包的にも外延的にも高められた労働力の搾取をともなつて、労働者階級のますます大きい部分を不生産的に使用することを可能にし、したがつてまたことに昔の家内奴隷を召使とか下女とか従僕とかいうような『僕婢階級』という名でますます大量に再生産することを可能にする。一八六一年の人口調査によれば、イングランドおよびウェールズの総人口は二〇、〇六六、二二四人で……このうちから……官吏や僧侶や法律家や軍人などのような『イデオロギー的』な諸身分……を引き去れば……」（『資本論』、マル・エン全集、第二十三巻、大月、インスティトゥート板、第一巻、四六九ページ、訳、五八三ページ、傍点―井田）。

右の引用文で不生産的な労働者階級といっているのはサーヴィスの提供者といわれているものをさしているといつてよいのであるが、サーヴィスの語法が今日のわたしたちの日常的なそれとはかなりこととなつているのがみられる。まず僕婢階級Ⅱ

かつての家内奴隷、それから国家活動に関連する不生産的なサーヴィス提供者となっている。こころみに辞典（相良編『大独和辞典』、三三〇ページ）の「Dienst」の項目をみると、(1)奉公、雇用（隷属）関係、……、(2)職務、……、兵役、……、(7)サーヴィス、……となっており、また別の辞典（岩崎編『ポケット英和辞典』、一一〇—一一一ページ）では、(1)奉公、雇傭、(2)神に仕へること、……(8)奉仕（顧客にたいする好意的待遇）、給仕、……、とも書かれている。この点に関連して、右に引用した『資本論』の最後の個所に、「ロンドンの小市民の家で使われている若い娘を俗語では“little slaves”、小さな奴隷と呼んでいる」（前掲書、四七〇ページ、訳、五八四ページ）と注記されていることは興味のあることである。

氏が国家的活動に関連する領域と商業の領域とをサーヴィスの対象から排除するしかたはまことに目をみはらせるものがあるといわなければならない。サーヴィスとは、当面の考察の関連についていえばなによりもまず、貨幣による労働の購買という関連、つまり自由な労働者の定在という社会関係が事実において前提されている。とすれば、軍人や役人の労働の貨幣による購買は、否定しえない資本主義の現実ではなからうか。たとえば、氏はサーヴィスの具体的内容を数えあげて学校教師にふれたとき、私立学校教師のみをとりあげて官公立の学校教師を慎重にもその目録からソットはずしている。国立大学の教師が貨幣と引換にその労働を販売しているのもまた事実ではなからうか。それとも、国立大学の教師による学生の頭脳の加工労働は、氏によれば個人の欲望満足に坎するものではないともいうのか。私立学校の教師によるそのみがかかる効果を生産しているなどというのでもあるまい。なるほど、私立学校は、それが私立学校であるということにおいて、すでに教育施設企業家のためのたんなる致富の手段でありうる。この企業家は、教育工場に投じられた価値額の維持増大のためにのみ教師の労働を購買する。かくして、この価値は資本となりこの教師は教育施設の所有者のために剰余価値を生産する生産的労働者となるであろう。国立大学の教師のばあいにはこうしたことは生じえない。しかし、かかる相違にもかかわらず、いずれのばあいにも非物質的生産の

領域に属する現象であるということ、両者ともに労働と貨幣との交換がおこなわれているということ、しかもこの交換は使用価値としての労働にたいする貨幣Ⅱ対象された一般の労働の交換としてのみなされているということ、こうした同質性的側面が慎重に検討されなければならないのであって、氏が強調しているように、「……生産的労働と不生産的労働との区別の基準は……資本家のために利潤をつくり出す労働であるか否かであってそれ以外ではない」（森下、前掲論文、一七ページ）という説明にのみすべてを帰着させあえて客観的事実を否定するならばともかく、このことの解明なしにはサーヴィス概念の科学的理解はおよそ不可能と考えられるのである。

かかる関連の承認を基礎としその帰結として、サーヴィスにつき価値を現実には生産する生産的労働としての性格を附与するというのがこの問題にしめされている氏の思想の進行における主要なすじみちであって、氏はこの最後の点をつぎのように説明している。

「……資本家的生産の本来目的とするところは剰余価値の、従って資本の生産である。それ故かかる社会においては剰余価値をつくり出す様な労働のみが真に生産的な労働の名に値する……。……。……非物質的生産の場合においては事の性質上資本家的生産の支配が困難である……。その結果資本制的生産の発展に伴って、物質的生産をなす労働はますます多く生産的労働となるに反し、非物質的生産をなす労働はなお多く不生産的労働に踏み止まっていることとなり、生産的労働と不生産的労働との素材的区別があらわれる。……スミスが生産的労働を物的生産に誤って限定したことの一つの理由はまさにここにあったのである。けれどもこれはあくまでも相対的なことがらである。……」

……マルクスの時代において『……狭少の範囲においてのみおこなわれ』……ていた非物質的生産が今日いかに広汎に資本家的生産に属しているかを見よ。かくして資本主義のさらに高度に発展した段階においては当然生産的労働の

『第二の副次的規定』は除外せられてその本来の規定のみで十分となり、かかる労働の分野をも生産的労働の中に含めなければならぬこととなる」(森下、前掲論文、一七一―一九ページ)。

そして、サーヴィスによる価値創造を裏付けるべく『資本論』の説明を論拠として、つぎのように引用しているのである。

「……どんな物も、使用対象であることなしには、価値ではありえない。物が無用であればそれに含まれている労働も無用であり、労働のなかにはいらず、したがって価値をも形成しないのである」(『前掲書』、五五ページ、訳、五六ページ)。

以上の説明においてはおよそ三つのことがあきらかにされなければならないものと考えられる。まず、産的労働の規定を物質的生産の分野に限定したのは、歴史的な制約によるとはいえ、根本的誤謬であるというスミス批判に名をかりたマルクス批判である。そして、それは、当然のことながら、生産的労働についての「本来の規定を補足する第二の副次的規定」は「除外せられて」無用の長物となるとの理解をも同時に内蔵することとなっている。最後に、生産的労働にかんする二つの規定が合して一つとなり、かくして調和のもとにおかれるにいたった生産的労働は、すべて現実には価値を生産するといっていることについてである。前二者にいつてはすでに検討されあきらかにされている。マルクスの「時代」をめぐる「擁護」と批判の問題ならびに「補足的な副規定」の「止場」の問題として考察されたものがそれである。それでは、最後の問題はどうかであろうか。氏のサーヴィスの定式化の見地からなされているサーヴィス提供による価値生産の主張はいかに考えるべきであろうか。「どんな物も」ではじまる『資本論』の右の説明ははたしてよく氏の主張を支える論拠たりうるであろうか。これは、周知のごとく、商品の二つの要因を分

析したのち、あらためてある物が商品たりうるためにはいずれの要因をも欠いてはならないことをあきらかにしている第一節の最後のところにみられる文章である。だが、この文章を「非物質的生産」の分野で機能する労働によって提供される「もの」にたいしても妥当させ、そこにおける価値生産を裏付けるものとすることはまったくのあやまりである。引用文が、「どんな物も」といい「使用対象」といっているのは、人間にたいして外的に対立する物のみを意味している。有用な諸属性をもつ外的対象こそが前提である。この文章をふくむ第一節の冒頭において、

「商品は、まず第一に、外的対象であり、その諸属性によって人間のなんらかの種類の欲望を満足させる物である」

(前掲書、四九ページ、訳、四七ページ)

といっている説明のなかから外的対象という規定を除くならば、それは、まったくの誤謬であり価値論の否定と科学的経済学の理論的基礎の否定とにみちびかれるおそれなしとしないものと考えられる。たとえば、教師、音楽家の生産物が、資本主義によってつくりだされた人間にとっての「有用な諸属性をもつもの」であり、人間の欲望充足の総範囲のなかで大きな比重をもつことは事実である。だからといって、それらが、人間による自然質料の獲得とそれに依存する欲望の充足つまり物質的生活そのものの生産と人間の生存にとって同等な意義をもつものと考ええることは到底できないのではなからうか。これらの精神的な享樂的欲望の充足は、自然質料の獲得を物質的条件とし前者を基礎として成立しうるものにほかならない。教育活動すなわち教師のサーヴィス提供にとっては、建物、黒板、机、椅子等のごとき物的手段が必要であらう。さらにより重要なことは、教師は生きることのできる状態になければならぬのだ。つまり、物質的生活資料の現存が根本条件となっている。音楽家によるピアノ演奏すなわち音楽家のサーヴィス提供は、なによりもピアノの生産によって条件づけられている。ピアノの生産とはとりもなおさず木材と金属と

の自然からの獲得とそれの加工とをふくむ。音楽家の達成する高度の技術と才能の発展とは、教師のばあいと同様に、物質的生活資料なしに獲得しうるものではないことは絶対的真理である。こうして、人間の欲望は、それがいかなる性格の欲望であれ、たとえそれが幻想から生じようと、その充足のためには外的対象としての生産物Ⅱ使用価値が不可欠の条件をなすことは否定しえない客観的事実である。ここに、商品を、まず第一に外的対象としてとらえることの決定的に重要な意義があると同時に、この対象的生産物獲得のための労働が、一定の諸関係のもとで、生産物に對象化し生産物の価値を生産するとされていると考えるべきではなからうか。

「価値概念を証明する必要があるなどというおしゃべりは、当面の問題についての……完全な無知にもとづくものにほかならない。いかなる国民でも、一年間はおろか二、三週間でも労働を停止しようものなら、たちまちまいってしまふということは、どんな子供でも知っている。また、種々の欲望の量に應じる諸生産物の量は……」（マルクス、「クレーゲルマンへの手紙」、中内訳、国民文庫、八七ページ）。

この有名なことばのなかで、わずかに二、三週間の停止によって一国民全体をくたばらせてしまふその労働とは、右にみた否定することのできない客観的事実に関連し、価値をつくる労働とはいかなる労働でなければならないかを端的にしめすものと考えられる。

いっさいの事実を無視して、「有用な諸属性をもつ有用労働」によってなんらかの個人的欲望充足の効果が達成されるという肯定的側面のみに目を奪われて、かかる効果を提供するサービスにたいしても生産的労働たる性格を承認するという実体転化の奇蹟を主張するならば、それは、まがうかたなき俗流経済学者流の効用価値論への「実体転化」そのものといわなければならないのであって、いかに氏が、「……ここである勤労の生産性は……俗流経済学者ある

いは多くの統計学者がその根拠としているが如き……、生産においてつくり出されるのは物財ではなくして効用であり、その意味において勤労もまた生産であるという……理由によ……るのではない」（森下、前掲論文、一九ページ）といったところで、それは無益な強弁にすぎないことはすでにみたとおりである。したがって、問題は、ここにふたたび使用価値としての労働として規定されているサーヴィス概念の解明が要請されているのを見ることができ⁽³⁾る。

(3) サーヴィスが価値を生産すると考え、価値概念ならびに生産的労働についての説明の根本的修正を軸点としている中西氏の理論を紹介しておこう。

氏はサーヴィス概念をつぎのようにとらえている。

『その遂行の瞬間に消失し、なんらかの永続的に（または特に）存在している対象あるいは販売しうる商品に（それらのサーヴィスそのものから離れて）固定されたり、対象化されていない』、『一般に物としてではなく活動として有用であるかぎりでの、労働の特殊な使用価値の表現』というサーヴィス概念の規定……」（中西、前掲論文、五一ページ）。

これによれば、氏は、サーヴィスとは成果において外的対象を生産しないばあいの労働である、とマルクスみずから規定していたといっている。この二重括弧内の文章は、氏の理解を裏付けるマルクス自身の説明であるというのであろうがはたしてどうであろうか。引用文の後半はさておき、その前半は、『剰余価値学説史』のうち「スミスの第二の説明、——商品に実現される労働としての生産的労働にかんする見解」のなかにあって、「スミスが、区別づけのための第一の……特徴のほかに、別の特徴をつけ加えるに至る内面的な思想進行の諸環をしめす」（前掲書、一二四ページ、訳、二二二ページ）べくスミスの文章を引用して、スミスが生産的労働とはなにかについてその第二の規定を与えたのは「重農主義者への依存および対立」によるといっているところがある。そして、この点をあきらかにするために、スミスが、「第二に」からはじめて手工業者等を召使と同じ観点から見るのは根本的にあやまりだといってその労働をサーヴィスとよび、「このサーヴィスは通常、その提供の瞬間に消滅してしまつて商品……には固定、実現されない」（前掲書、一二六ページ、訳、二二五ページ）という特徴の故にこれは不生産的労働と規定されなければならない、といっているスミスの文章が引用されている。こうしたスミスからの引用について、マルクスは、「第一に」、「から」「第四に」にわたつてスミスの以上の第二の規定にせめかれたあらたな観点の批判を

おこない、労働の質料的規定性とはかわりなく規定された説明の観点からみると、そこにはいかに多くの矛盾や不徹底さが不可避免的に内蔵されるかをあきらかにしているのであるが、その「第三に」のところではつぎのようにいつている。

「第三に他面、劇場・音楽会・女郎屋などの企業家は、俳優・音楽家・売春婦などの労働能力にたいする一時的処分権を賣う、……すなわち彼は、その『サーヴィスがその提供の瞬間に消滅』して『ある耐久物』(またいわく『特殊な対象』)『または売ることのできる商品』(彼等じしん以外の)に固定または実現されないような、このいわゆる『不生産的労働』を買うのである。これを公衆に売ることによって、彼は労賃と利潤を回収する」(前掲書、一二九ページ、訳、一二九ページ)。

ここであきらかなように、この文中にある二重括弧内のことは、いうまでもなくスミス自身のことばである。また、「このいわゆる『不生産的労働』と同じく二重括弧つきでいつていることは、スミスの第一の正しい見解とからみあった間違つ見た解による不生産的労働の規定によればということであることをしめしている。スミスのこの規定の観点からすれば、不生産的労働の提供にはかならない諸活動は、これら諸活動の購買者たる企業家にたいしてそれを支払うための元本の更新を保障するにとどまらずそれをこえる剰余をも獲得せしめるのであって、したがってこの「不生産的労働」は生産的労働そのものである。こうして、「不生産的労働」が生産的労働であるならばこれが背理でなくてはならないのである。また、「この『第三に』」のなかでいつわれているスミスの命題にたいする批判の核心であるといわなければならない。氏によってマルクス自身のサーヴィス概念の定式化として紹介されたさきの引用文こそ、右に概観したとき関連のなかで、マルクスにより右の「第三に」というところで二重括弧でしめされていた事実上スミス自身のことばであったのである。つまり、マルクスは、スミスの命題がふくむ矛盾をより一そうあきらかならしめるべくスミス自身のことばを二重括弧つきで利用しているのであり、いわば背理の象徴とみななければならず、いわんやここに科学的なサーヴィス概念の提供があると考えるのは愚かなことといふべきである。

そして、氏の理解についてさらに問題と考えられることは、事実上でのこのスミスのことばは、いまみてきたとおり、スミスの規定がふくむ背理の検討のための引用であつて、けつしてスミスのサーヴィス概念そのものの妥当性の検討のためにそうしているのではないということである。もし、考察の目的が後者にあるならば、かかる引用のしかたでは不充分であるにとどまらずあやまりですらある。スミスは、さきに引用したとおり、このサーヴィスは通常活動と同時に消滅するとはいへ、あらゆるばあいにおいてであるといつてはけつしてないのだ。つまり、活動とその成果との関連において消滅不消滅は必ず

しもサーヴィスの規定の本質的契機をなすとはミス自身ですら考えていないことをこの通常なることばはしめすものと考えなければならぬ。しかるに氏は、以上のごとき諸点をいっさい捨象して、それがあたかも、『直接的生産過程の諸結果』、『剰余価値学説史』の中で数多く挙げられているマルクスによるサーヴィス概念の規定』（中西、前掲論文、五一ページ）であるといつて引用しているのがことの真相である。

以上、多くの引用を重ねながら遊部・森下両氏のサーヴィスについての理論につきやや立入った考察をおこない、サーヴィスについての基本的把握の手がかりをうる事ができたものと考えられる。そこで、以下においては『剰余価値学説史』等においてのべられている説明につき簡単に要約することとしよう。

二 サーヴィスの本質と労働の二重性

資本にとつての生きた労働のもつ独自の使用価値について、マルクスはつぎのようにいつている。

「資本にとつての労働の独自の使用価値を形成するものは、労働の一定の有用的性格でもなければ、労働の対象化たる生産物の特殊的・有用的属性でもない。それは、交換価値を創造する要素としての労働の性格であり、抽象的労働であり、しかも、それが総じて一定分量のこうした一般の労働を提供するということではなくて、その価格すなわち労働能力の価値に含まれているよりも大きな分量の一般の労働を提供するということである。……。以上でのべたところからわかるように、生産的労働だということは、さしあたり労働の一定の内容・労働の特殊の有用性・または労働の対象化たる独自の使用価値・とは絶対にかかわりのない、労働の一規定である。同じ種類の労働が、生産的でもありうるし、不生産的でもありうる」（前掲書、三六四ページ、訳、五八六―五八七ページ、傍点―原文）。

この説明は、当然のことながら、他方では、労働が価値をつくりだす要素としてではなくその使用価値のために買

われるばあいについてのつぎの説明と対立するものであって、それは、貨幣所有者が布を買ってきて、賃労働者としての裁縫職人にズボンを生産させるばあいについての説明である。

「さて、この交換における特徴は何か？ この交換は何によって、貨幣と生産的労働との交換から区別されるか？ 一方では、貨幣が貨幣として——ある使用価値・生活手段・個人的消費の対象——に転形されるべき、交換価値の自立的形態として——支出されるということによってである。……。他方では、労働がわたくしにとって大事なものは、ただ、使用価値としてであり、布をズボンに転形するサーヴィスとしてであり、その一定の有用的性格がわたくしに提供するサーヴィスとしてである。……。わたくしが裁縫労働を買うのは、それが裁縫労働として提供するサーヴィス——わたくしの着衣欲をみたし、したがってわたくしの欲望のために役だつというサーヴィス——のためである。……。かように、貨幣と労働との単なる交換は労働を生産的労働に……転化させないとすれば、労働の内容、具体的性格、特殊の有用性も、さしあたり、どうでもよいことのように見えるのであって、……同じ裁縫職人の労働が一方のばあいには生産的なものとして現象し、他方のばあいにはそうでないのである」（前掲書、三六六—三六八ページ、訳、五八九—五九二ページ、傍点—原文）。

この二つの引用文のなかに問題の核心の手がかりがみられるのであって、およそつぎのごとく要約することができると考えられる。

資本にとっての労働の使用価値をなすものは、その労働がもつ価値創造的要素としての労働の性格であり抽象的・人間的労働としての労働の側面である。

他方、使用価値として消費されるばあいには労働が提供するものは、具体的・有用的労働としての労働であり有用な

形態でなされるその有用的性格である。

活動の結果の消滅不消滅とはかわりなく、流動状態における労働そのものの提供する効用による直接の欲望充足がなされる。

流動状態における労働そのものの提供する効用自身にたいして貨幣が直接に交換される点において商品を生産する労働といちじるしくなっている。すなわち、後者のばあいを見ると、商品の使用価値としてあらわれる具体的労働は、この自然形態のままでは私的労働にはならない。それは、抽象的・人間的労働に還元され、この形態で社会的総労働の一環となり社会存続のための社会的労働として自己を現実化することができるからである。

使用価値としての労働によって提供される効用それ自身にたいする貨幣支払は、商品の購買とは本質的にことなつて、価格形態の発展強化であり価格形態がもちうる「質的な矛盾」の展開といわなければならない。すなわち、商品の価格は、商品に対象化されている社会的労働の貨幣名である。「しかし、価格形態は、……一つの質的な矛盾、すなわち、貨幣はただ商品の価値形態ではないにもかかわらず、価格がおよそ価値表現ではなくなるといふ矛盾を宿すことができる。それ自体としては商品ではないもの、たとえば良心や名誉などは、その所持者が貨幣とひきかえに売ることのできるものであり、こうしてその価格をつうじて商品形態を受け取ることができる。それゆえ、ある物は、価値を持つことなしに、形式的に価格をもつことができるのである。ここでは価格表現は……想像的なものになる」(『資本論』、一一七ページ、訳、一三六ページ)のであって、使用価値としての労働の提供する効用にたいす貨幣支払は価格表現は、まさしく、想像的なものにほかならないからである。

以上の考察からあきらかなように、究極において、経済学の理解にとつての軸点をなす労働の二重性にたいする明

確な理解を必要としているのであって、サーヴィスとは、使用価値として消費されるために労働が買われるばあいこの有用な形態での労働そのもの・労働が提供する効用それ自体・をしめす独自の表現であると考えられる。『直接的生産過程の諸結果』において、『サーヴィスすなわち使用価値としての彼の労働』（マル・エン選集、第九巻、四四四ページ）といったり、『剰余価値学説史』において、「彼のサーヴィスすなわち彼の裁縫労働」（三六五ページ、訳、五九九ページ）といったっている簡潔なことは、こうした内容をしめす表現である。

使用価値として消費されるための労働によって提供される効用それ自体すなわちサーヴィスが、その機能の結果、人間にたいして外的に対立する物に実現するかそれともそれが機能し流動するともに消滅するかということは、本性上、サーヴィスの提供としてのこの労働の規定性をなんらかえるものではない。この点はつとにスミスによっても承認されていたことでありマルクスもまた確認している。すでに簡単な検討をおこなったように、スミスは、生産的労働についての第二の規定をのべて工業労働者等に対比して召使を対象としてとりあげたとき、その労働をサーヴィスとよび、つづいてサーヴィスを一般的に特徴づけて、このサーヴィスは通常その機能とともに消滅して商品あるいは物に実現されないがゆえに不生産的労働であるといっているのであるが、これにたいしてマルクスはつぎのようにいっている。

「だが、この『不生産的労働者』の総数が多かろうと少かろうと、労働を『生産的』または『不生産的』にするものは、必ずしも労働の特殊性ではなく、またその生産物の現象形態でもないということだけは、いづれにしてもあきらかであり、また、彼のサーヴィスは通常、その提供の瞬間に消滅して云々」という、この限定によって認められている。同じ労働でも、私がそれを価値増殖するために資本金・生産者・として買うならば生産的でありうるし、ま

た、私がその使用価値を消費するために消費者・収入の支出者・として買うならば、この使用価値が労働能力の活動そのものとともに消滅するか、それとも、ある物に物質化され固定されるかを問わず、生産的でありうる」(前掲書、二二八ページ、訳、二二七—二二八ページ、傍点—原文)。

また同じ召使のばあいについて、召使の大衆には当てはまらないがとの限定を附しながら、つぎのようにもいつている。

「……召使の特定の労働も、やはり、商品(可能性からみれば)となってあらわれるかもしれない、むしろ、質料的にみれば「商品と」同じ使用価値となつてあらわれるかもしれない。だが、その労働は生産的労働ではない。というわけは、召使は事実上、『商品』を生産するのではなく、直接に『使用価値』を生産するからである」(前掲書、一三五ページ、訳、二三九ページ、傍点—原文)。

使用価値としての労働という規定について、その皮相的な理解と相俟つて使用価値という規定に固執し、この使用価値が、いかなる種類の労働であるかを問わず、それに直接に見合った個々人の享樂的欲望Ⅱ個人的欲望を本質的契機としている規定であると考えてはならない。社会的に發展せしめられる欲望もまた欲望であり、したがってその充足もまた個人的欲望の充足と同様に欲望の充足である。だが、この社会的な欲望とその充足は、必ずしも、個人的欲望のばあいにみられるごとく享樂的欲望のみをふくむものと考えらばそれは事実に反するであろう。資本主義社会において押しつけられるものとしてあらわれるサーヴィスもまたサーヴィスであるとはいえ、そのばあいかなる享樂的欲望をも語ることではないからである。と同時に、使用価値としての労働のうち労働という規定に固執し、買われるのは有用な形態での活動であるならば、それはすなわちこの活動の提供者からひきはなされて、その外

部にある独立の生産物には転化されえないということを本質的契機としている規定であると考えてはならない。それ
もまた前者同様に一面的な理解というべきであろう。

「貨幣が直接に労働と交換されて、その労働が資本を生産しない——つまり生産的労働でない——ばあいには、労働はサーヴィスとして買われるのであって、このサーヴィスなるものは、総じて、他の各商品と同じように労働が提供する特殊の使用価値をあらわす表現にはかならない。といっても、労働がサーヴィスを提供するものは物象としてではなく活動としてであるという限りでの、労働の特殊の使用価値をあらわす独自の表現である……」(前掲書、三六七ページ、訳、五九一ページ、傍点—原文)。

ここに引用した説明のなかで、「物象としてではなく活動としてである」といっているのも、さきにみた使用価値としての労働という規定とまったく同じ内容をしめす規定と考えるべきであって、さきに指摘したおこりうる一面的な理解を正当化する論拠とすることはできないことを知らなければならぬ。

サーヴィス概念をこのように理解するならば、価値創造的要素としての労働、抽象的・人間的労働としての労働が生産物に物質化して生産物の価値対象性として独立化⁽¹⁾するということは問題になりえないものとなる。それは、価値をつくり剰余価値をつくる物的基礎をそもそももたず、いわば労働が価値創造者としての機能を喪失してしまつて、したがつてそれは、一般的労働を提供して現実⁽¹⁾に価値を創造することはできないものとなつてゐるのである。このことは、それが資本のもとに包摂される事態が生じたとしても、本性上、いぜんとして真理である。資本制的生産の発展によつて、対象的富の生産は、自己消費のための注文生産としておこなわれた生産からますます商品としての生産に転化していく。かつて、サーヴィス提供にすぎなかつた裁縫労働は、それが布をズボンに転形する有用性そのもの

のによつて直接にこの裁縫労働の買い手の着衣欲をみたすということをやめて、市場めあてにみずからズボンを生産する商品生産者となる。そして最後に、彼は独立せる商品生産者たることをもやめて資本に従属し、ズボンは剰余価値をもふくむ商品として生産されかかる商品の形態において買い手の着衣欲を充足するものとなる。こうして資本によつて生産が征服されていくのとは歩調をあわせて、他面では同時に、「資本主義的生産様式はかぎられた範囲内で生じるにすぎず、またことがらの性質上若干の部面で生じうるにすぎない」（『直接的生産過程の諸結果』、四五二ページ）とされているサーヴィスとしてのみ使用されうるにすぎない労働、たとえば俳優、教師等は、自身有用な形態での労働そのものの販売者であることをやめて資本のもとに包摂され、労働が提供する効用それ自体の「生産」もまた資本家の指揮監督のもとでおこなわれるという事態がますます発展する。こうして、かかるサーヴィスもまた他の諸商品ともども資本によつて「生産」される個人的サーヴィスⅡ「商品」として販売されるにいたるのである。「そこで、生産的労働者すなわち資本を生産する労働者の特徴としてあげうるのは、彼等の労働は商品たる物質的富に実現されるということである。かようにして生産的労働は、その決定的な特徴——これは、労働の内容とはぜんぜん無関係であり、かかわりのないものである——とはことなる第二の副規定を受けとることになる」（『剰余価値学説史』、三七三ページ、訳、六〇〇ページ、傍点—原文）。つまり、補足的な副規定の定式化の必然性がここにあるといえよう。

（１）長岡豊氏はサーヴィスについての常識的語法をそのまま踏襲し、「マルクス体系」なる不安定な構築物の基礎を補強すべく、歴史の根本条件Ⅱ物質的生活そのものの生産というに命題に対決して、サーヴィス提供は価値を生産すると主張しつぎのようになっている。

「人間社会の存続の永遠的な基本条件は何か……という……場合、生産的労働を、『物』を生産する労働だけに限定するこ

とは、現代的観点からみて果して妥当であろうか。……。生産力の発展とともに、人間の欲望およびこれに応じて生産されるべき『物』したがってまた……。基本条件たるものの内容が、きわめて多様化してくる。第二に、この多様化した基本条件のなかに『物』を生産しない……労働……サービス労働……が入りこみ、基本条件としてその重要性が……高まってくる。……。……社会生活の多様化は、教育者、芸術家、官吏、法律専門家、洗濯屋、散髪屋などが提供するサービスへの欲求を高め……。たとえば、教育者のサービス労働は、……家庭電化製品という『物』を生産する労働よりも……飛行機や自動車を生産する労働よりも、現代社会を維持するための基本条件としてはより重要であろう……。教育というサービス労働を遂行する教師はパチンコ機械という『物』を生産する労働者に寄生しているとはおもわれない。これは……。倫理的な判断であるが、この判断は、サービス労働も価値を形成すると考えることによって、理論的な裏づけをえる」（長岡豊「生産的労働と価値」『福岡大学創立三十年記念論文集（経済学編）』所収、八六—一〇一ページ）。

氏は、『ドイツ・イデオロギー』から自在にかぎりなく多くの引用をして、「人間社会の存続の永遠的な基本条件とはなにか」と数十回も繰返しているのであるが、森下氏の見解について誤謬たるゆえんを指摘したとおり、氏のこの結論もまたあまりである。それは、古典の説明の理解においてあやまりであるとともに、「生産力の発展にともなう社会生活の多様化」を結果せる歴史的現実によっても否定されているあやまりである。教育者のサーヴィスは飛行機や自動車を生産する労働よりも社会の維持にとって重要であるといっているが、飛行機や自動車の生産なしに、総じて交通・運輸手段の発展なしに、現在のごとく高度に整備された教育制度をつくりだした資本主義社会を想定することができるとでもいうのか。教師のサーヴィス提供は、物的な教育手段ならびに教師のための「衣食住その他の基本的欲望をみたすための物」によって決定的に条件づけられているのではないとでもいうのか。「どんな子供でも知っている」この絶対的真理を承認しないさきの氏の立論は、氏の『ドイツ・イデオロギー』にたいする博識ぶりにもかかわらず、そこでマルクスが、物質的生活の生産がすべての歴史把握にとつてもつ広汎な全意義を深く考えこの基本的事実の占めべき地位を正しく理解せよ、といっている指示にたいする無理解を証明する以外にはなにものをも証明していない。氏が、人間の生活にとつてのなんらかの必要あるいは有用性をもつ活動は、それが物に実現すると否にかかわらず、それが「使用価値」を「生産」することにおいて同時に価値をも生産していると主張するならば、それは、「使用価値」あるいは効用によって価値を規定する効用価値論の立場にあることを証明する。かくして、氏の見解は、サーヴィス概念の科学的理解の欠如によって決定的に制約されていることをしめす一典型といえよう。

同じ労働の形式と内容として統一的に機能すべき人間の労働たる具体的・有用的労働と抽象的・人間的労働という二つの側面は、商品生産のもとでは、私的労働と社会的労働として分裂し商品における矛盾としてあらわれたのであるが、資本制的商品生産のもとでは、それら二つの側面はサービスと生産的労働とに決定的に分裂しているものということができよう。